

西蒲原地域における中世の歴史像とその教材化 — 吉田小学校における実践の紹介 —

田 村 裕

Medieval world and its educative treatment in the Nishikanbara region

Yasushi Tamura

はじめに

小論は、2000年9月に西蒲原郡吉田町立吉田小学校で、6年生を対象として、「吉田町周辺の中世の歴史」と題する小単元を設定し、3時間の授業実践を試みたものの紹介である。

当時、教員養成学部における教科専門のあり方が問題として指摘されていた頃であったろうか。前年秋に教育実習の現地指導で吉田小学校を訪れた際、5年生を担当している石田綾子教諭から、来年6年生の担当になったら地域素材を扱った歴史分野の授業を試みて欲しいと、頼まれていた。

現行の小・中・高等学校の各学習指導要領においては、内容知・方法知を含めて、地域の歴史を扱うことが要請されているが、通史学習の中にどのように地域史を取り入れるか、とくに中世の歴史は教育現場では必ずしも十分な実践が試みられていないようである。

小生が実践した小単元では、吉田町域周辺の地域素材から出発して、吉田町域に生活する人びとの視点から、南北朝・室町期の越後および日本史像の一端を描くという作業を、児童とともに試みたものである。

児童の歴史的ものの見方・考え方を育成するためには、児童の思考や活動過程を十分に配慮した教材を準備し、組み立てる必要があると考える。それが充分になされているか否か、いささか心許ない。また、調べ学習・現地見学・討論など、児童の学びの過程・活動の過程を充分には組み込めてはいないことも最初にお断りしておかなければならない。

教えることから、支援することにシフトを替えた近年の授業論からすれば、的はずれの実践とも評価されかねないと思われる。しかし、授業論の前提に、教える側が地域素材を組み込んだ教育内容の十分な蓄積が要請されていることは間違いなからう。小実践は、歴史研究の成果をふまえ、どのような教材を開発し組み立て、地域史から日本史像に迫るかを主要な課題としたものであり、未熟なものではあるが、教員養成学部における教科

専門の教員が果たすべき一つの役割を示すものである。

なお、小生の授業に先立ち、石田綾子教諭は、戦国末期までの中世の歴史を終えており、それを前提に授業を組み立てたものである。

1. 中世西蒲原地域の歴史像

中世における越後国の歴史像を描く場合、国衙や守護所など一国に及ぶ行政権力が所在した米山西南の頸城郡と、有力な地頭・国人領主が盤踞した阿賀野川以北の沼垂・岩船両郡とが対比的にとらえられる。前者は国衙領が圧倒的に存在し、後者はほとんどが大規模な荘園群に覆われていた。これは平安後期における荘園・公領制の形成のあり方に規定されたものであるが、そのなかにあつて越後平野の中心部を占める蒲原地域は荘園と国衙領が混在していた地域である。

信濃川は大河津で西川と東川に分流し、さらに三条付近で東川から中ノロ川が分流するが、西蒲原郡はおおよそ中ノロ川以西の地域である。中世におけるこの地域は、現在の自然景観とは異なり、西川やその分流が乱流し、大小の潟湖や湿地が散在する荒涼とした自然景観を呈していたと思われる。農業の展開という側面からみると、弥彦・角田・国上山麓が比較的安定していたと思われるが、平野部では、自然堤防上の畠作と、低湿地帯における不安定な稲作が細々と展開していたに過ぎなかったのではなからうか。

しかし中世における西川とその分流は、現在とは比較にならないほどこの地域の歴史に大きな地歩を占めていた。あるいは、人と物の流れを担う交通・運輸の大動脈として、あるいはまた漁業の場として、非農業民が広汎に活動する舞台であった考えるのである。

西川とともに、西蒲原地域の中世の歴史を特徴づけたのは、越後国一宮・一寺の位地を占めた弥彦神社と国上寺の存在である。これらは単に宗教的権威として存在していただけではなく、中世においては、この地域

の政治的・社会的秩序の中心に位置していた。

この地域における荘園としては、弥彦・角田・国上山麓に弥彦荘と福雄荘が所在したが、西川やその分流域には小規模な国衙領も散在していた。吉田町域には国衙領の単位所領である吉田保・米宇津・中治田保が所在したことが確認されるが、信濃川が西川と東川に分流する地点に所在した大河津や、西川と島崎川とが合流する地点に所在した粟生津もまた国衙領の単位所領であろう。

近世に長岡船道が展開した西川の河港として繁栄する現在の吉田市街地中心部のみならず、中世においては、米宇津(米納津)・粟生津・大河津らの交通の要衝に存在した「津」は、人々が集住する「都市的」側面をもっていたことに留意したい。

南北朝期から室町期にかけて、西蒲原地域を活動の舞台とした武士団として弥彦荘石瀬を拠点とする小国氏や同じく弥彦荘黒滝城を拠点とする黒滝氏(のちの山岸氏か)、さらに福雄荘の一分地頭としてあらわれる池氏がいた。黒滝氏は不明であるが、小国・池氏はともに鎌倉期にこの地域に進出した鎌倉幕府御家人であり、三氏とも弥彦神社の神職でもあった。

弥彦神社は越後国一宮として蒲原郡内の港津に経済的権益(津料徴収権)をもっており、小国氏らの武士団もこのような経済的権益と深く関わっていたことが予想される。なお、西蒲原地域に残る菖蒲塚伝説(源三位頼政の妻妾伝説)は、いずれも小国氏の所領の存在と関わるものであろう。

この地域の武士団は、南北朝動乱期に、「蒲原津」(現新潟市域に所在)の掌握をめぐる、南朝勢として、室町幕府・守護側と激しく戦い、抵抗したことがわかる。それは西川およびその分流域をめぐる両者間の流通・交通体系の掌握をめぐる戦いでもあった。

室町期にはいと守護上杉氏は、吉田保・米宇津を室町幕府将軍・足利家の菩提所である京都の等持院に寄進している。この寄進には、守護側が小国氏ら弥彦神社の勢力をを排除し、この地域の流通・交通体系を掌握するため、室町将軍家の力を背景にしようとしていたことが予想される。

この地域に、守護の支配が本格的に展開していくのは、15世紀後半である。それまで在京が原則であった越後守護家は、上杉房定の段階に至り、越後に腰を据えて領国支配に乗り出したのである。守護支配に抵抗を続けていた西蒲原の勢力を支配下に置くため、房定は弥彦神社の統制に乗り出してきた。15世紀末葉に至ると、守護側は吉田保・米宇津の年貢を等持院に負担

せず、これを押領する事態が展開するが、それは室町幕府体制から脱却した守護の独自の領国支配の進展を物語るものであろう。西蒲原地域にも、中央権力が衰退し、地方分権が進展する戦国期的様相を帯びてくる事態が準備されつつあった。このことは一方では、小国・山岸両氏等が守護・戦国大名へ家臣団化していくことにつながっていく。

しかし、戦国初期には、「吉田十人衆」の存在が確認されることに留意したい。彼らは府中権力に敵対したためか、「吉田十人衆」の所領は、府中権力側の武士たちに恩給地として宛て行われたことがわかる。「都市的場」が散在する吉田町周辺には、小国・山岸らのように大名権力に従属する国人領主的存在ではなく、武装化した商人的小領主層が成長を遂げていたのではなかろうか。

西蒲原地域の中世に関わる残存史料は、越後の他地域に比べると少なく、未だ十分な歴史像の解明が進んではいないが、以上述べたような、西蒲原地域の中世の歴史像は、以下のような拙論で関説している。

【参考文献】

- 田村 裕 『新潟県史』通史編序章第二節「古代の中の中世」、1987年
- 同 上 「中世越後国の地域構造」(『北日本中世の総合的研究』所収、東北大学文学部刊)、1988年
- 同 上 『燕市史』通史編第二章「中世の燕とその周辺」、1993年
- 同 上 『図説新潟県の歴史』100～4頁、河出書房新社刊、1998年
- 同 上 「南北朝の内乱」(『中世の越後と佐渡』所収)、高志書院刊、1999年
- 中世諸国一宮制研究会編『中世諸国一宮制の基礎的研究』363～373頁「越後国」(田村執筆分)、岩田書院刊、2000年

2. 授業の展開(全3時間)

以上のような西蒲原の中世の歴史像をふまえて、6年生の児童にどのような授業を計画し、歴史的なものの見方、考え方を育成するかというのが、小生の実践の目的である。指導計画案は3に示すが、ここでは、どのような教材を組み立てて授業を展開したかを、具体的に述べておきたい。

I

1時間目は、「中世の吉田町周辺」と題して、吉田町

周辺の中世の歴史の舞台(景観)を考えることを主たる目的とした。

(1) まず、吉田小学校の児童が通学時に眺めている景観を、授業の導入とした。**写真1**は、通学路東側の西川に架かる「学び橋」から西側方向を撮影したものである。また**写真2**は同じく通学路南側の西川に架かる「中央橋」から南側方向を撮影したものである。この二枚の写真から、中世の吉田町域に住む人びとが見た景観を想像し、この地域の歴史の特徴を象徴的に示すものとして、その位置づけを指摘することから授業を始めた。

写真1は、西川と弥彦山塊が前面に広がる風景であるが、中世のこの地域の歴史を特徴づけるシンボリックな景観として「弥彦山」と「西川」をおさえることが重要であること、すなわち「弥彦山」はこの地域の宗教的な権威を象徴するものであり、この地域の人々が形成する政治的・社会的な秩序の中心に位置するものであったこと、また「西川」は、この地域に生きる人々の交易等生活の舞台であり、両者があいまってこの地域の中世の歴史が特徴づけられることを最初に簡単に説明した。

写真2からは、近世に河港として繁栄した吉田地域の雰囲気伝えるものであり、その原型は、中世まで遡る可能性があることを指摘した。

(2) ついで分水町大河津で信濃川より分流してから、新潟市平島で再び信濃川に合流するまでの現在における西川の流路を、**写真3**～**写真6**で示し、大正 11 (1922)年に大河津分水の開削・通水後、西川が人工的に統御された川になっていることをまず確認した。しかしそれ以前の西川が、長岡船道として河川交通の重要な役割を担っていたことを、**写真7**・**写真8**から説明した。

(3) 次に「大河津」のように「津」のつく地名を、現在の吉田町域から挙げるよう児童に求めたが、即座に「米納津」・「粟生津」の地名を答えてくれた。そのうえで、正保二(1645)年の「越後国絵図」(新発田市中心図書館所蔵)の模写図(**写真 16**)の読解から、①「大河津」・「粟生津」・「米納津」がどのような地点にあったか、②西川の川幅はどのぐらいであったかを、読み取ることを児童に求めた。

大河津は信濃川が西川と東川に分流する地点に所在すること、この絵図では、西川も東川も信濃川と呼称されることがあったこと、西川と東川は分流地点近くではともに 48 間(約 86 メートル)と記されており、江戸時代初めの西川は、現在の吉田町域を流れる西川の十倍程度の川幅であったことを児童とともに確認した。ついで「粟生津」は、出雲崎方面から流れてくる島崎川と西

川の合流点近くに所在することから、「津」とは河川交通の重要な所に位置すること、また「米納津」は、この国絵図から、西川の分流に位置していることなどを確認した。

(4) 以上のような展開のうえで、次の【史料1】の応永 13(1406)年 11 月 20 日の「越後守護上杉房方寄進状案」(京都・等持院文書)の読み下したものを黒板に掲示した。

【史料1】

「とうじいん等持院に寄進いたします。

越後国蒲原郡内吉田保・同郡米宇津のこと。

右、考えることがありまして、寄進いたします。

応永十三年十一月二十日 よのうづ沙弥常越 しゃみじょうえつ みさかた

(一四〇六) (越後守護・上杉房方)

そして「吉田保」・「米宇津」という吉田町域の地名が 15 世紀前半に遡ること、これが守護支配下の国衙領であり、その成立は 12 世紀前半まで遡る可能性があること等を指摘した(なお、本史料は、3時間目の中心的教材としたものである)。

(5) 次に、吉田町米納津から出土した珠洲焼の甕と、その中に納められていた埋蔵銭(**写真9**)を映写し、15～16世紀の米納津には、富を蓄えた人が存在したこと、そこから河川流域に存在した「津」とは、富裕な商人が存在する「都市」的側面をもつ所ではなかったかということを述べた。また江戸期に河港として繁栄する現在の吉田市街地周辺に所在したと推測される「吉田保」も、中世にさかのぼり「都市的な場」を含み込む所領ではなかったかということも指摘した。

(6) 本時の結びとして、空中写真(**写真 10**・**11**)から、現在の吉田市街地をはじめとする西蒲原の集落は、西川およびその分流の旧河道を物語る自然堤防上に存在すること、また現在ではその痕跡が明確ではないが、1947年に撮影された米軍の空中写真からは、かつてこの地域にあった多くの潟湖跡が読み取れることを、写真を提示したうえで説明した。

これは児童がみている現在の西蒲原地域は、日本有数の穀倉地帯として水田稲作農業が展開する舞台となっているが、中世までさかのぼると、河川が乱流し、大小多数の潟湖が存在する景観をもつものであったことを確認するためであった。

II

2・3時間目は、1時間目の授業を受けて、この地域の中世において、どのような歴史が展開したかを検討し、児童とともに、この地域からどのような日本史像を描くことが出来るかを実践したものである。

2時間目は【吉田町周辺の武士たち】と題して、中央政治史の流れと、鎌倉期以降中世を通してこの地域に展開した小国氏という武士団の歴史を追いながら、南北朝動乱期における西蒲原地域の武士団の動向とその特徴を理解することにつとめた。

(1) 導入は、前時の復習も兼ね、正保国絵図の読み取りから、信濃川が西川・東川に分流する大河津から出発し、西川の流れが現在の新潟市付近で再び信濃川に合流し、さらに信濃川が阿賀野川と合流して日本海に注ぐまでの流路を追い、また河口付近南側には、古代以来、越後国のもっとも重要な港津として展開した「蒲原津」が所在することを確認した。そのうえで、「蒲原津」が日本海交通と越後平野の内水面交通の結節点に位置したことを説明した。

(2) 本時で取り上げる主要な武士団である小国氏について、西蒲原地域の菖蒲塚伝説(岩室村・燕市・巻町等に伝わる)を、とくに燕市小中川に伝わる事例から紹介し(写真12)、菖蒲塚伝説は中世武士団小国氏の所領の存在と関わるものであり、南北朝期の小国氏は岩室村石瀬を拠点とするが、広く西蒲原地域に散在する所領を領有する武士団であったことをまず確認した。

(3) そのうえで、写真13の小国氏系図と後掲の【小国氏および吉田町域関係略年表】から、鎌倉前期から南北朝期に至るこの武士団の足跡について簡単に触れた。小国氏が、①1180年に以仁王とともに平氏を打倒するため京都で挙兵した源三位頼政の弟・頼行に系譜する武士団であること(この点は前項でもふれた)、②鎌倉前期までには越後國小国保(現刈羽郡小国町付近)の住人と称されるようになり、小国姓を名乗ったこと、③おそらく鎌倉中期までには、その一族の中から岩室村・石瀬に進出する者たちがあったこと、④小国氏は弥彦神社の神官をつとめるものであったことなどを、ここで児童に説明した。

(4) 次いで南北朝動乱の過程における小国氏らの動向を【年表】によりふれたが、とくに1335年12月11日の箱根・竹の下での戦いで、小国氏は、京都から攻め上る新田義貞の軍勢として参陣していたこと、この戦いで、鎌倉から出陣して新田義貞の軍勢を迎え撃った足利尊氏軍に敗北するが、小国氏ら越後勢は京都に逃げ帰る新田義貞の軍勢と別れ、一週間足らずのうちに越後に

戻り、蒲原津を占拠することに注目させた。現在の暦でいうならば、1月末から2月初旬にあたる厳冬期に、小国氏らは太平洋側の箱根から日本海側の蒲原津にどのように戻ったのかを、日本中部地域の地図から検討させたのである。

これを本時の主要な検討課題としたが、児童は①上越国境の三国峠を越えて魚野川・信濃川を辿るコースと、②富士川を遡り、甲斐から信州・佐久平へ、そして千曲川・信濃川沿いに蒲原津へ向かうコースの二つを想定した。いずれにしても、小国氏が、河川に生きる人々を配下に置いた武士団であったことから、とくに越後に入ってから、河川交通を利用して蒲原津に到着した可能性があることに着目させたのである。

III

3時間目は【吉田保と米宇津】と題して、吉田町域に展開した中世の歴史の特徴を、とくに室町期に越後守護上杉氏が吉田保・米宇津を室町将軍家の菩提所である等持院に寄進した意味から考えることを主眼とした。

(1) 最初に前時までの授業をふり返ったうえで、本時で主要な検討対象とする応永13(1406)年11月20日の「越後守護上杉房方寄進状案」(京都・等持院文書)の読み下したものを黒板に掲示した。本史料は1時間目でも取り上げたものであるが、再掲しておきたい。

【史料1】

「等持院に寄進いたします。
越後国蒲原郡内吉田保・同郡米宇津のこと。
右、考えることがありまして、寄進いたします。
応永十三年十一月二十日 沙弥常越
(一四〇六) (越後守護・上杉房方)」

上記史料を読解したうえで、なぜ越後守護上杉房方は、吉田保・米宇津(=米納津)を、室町幕府将軍家足利氏の菩提所である京都・等持院に寄進したのか考えてみよう、という問題を児童に提起したのである。

児童にとって「寄進」の内容を理解することが困難であったが、吉田保・米宇津が、越後守護の領有する国衙領であり、守護は所領からの経済的収益権をもつと同時に、これら二つの所領の管理・処分権をもつものであったことをまず確認した。

(2) ついで後掲の【小国氏および吉田町域関係略年表】から、南北朝後期から室町期の小国氏の動向を児童たちに確認させた。南北朝期に小国氏は当該地域の南朝勢の首将として活動していたが、室町幕府側の勝

利が決定的となった 14 世紀後半においても、小国氏は、三条に居住する守護方の長尾新左衛門を夜打ちし殺害していること、また南北朝合一後の明徳4(1393)年には、関東管領家上杉氏が領有する蒲原津を力づくで占領しようとしていること、さらに 15 世紀のはじめには、守護に従って京都に行っている時に、守護側に謀叛を企み、京都から逃亡したこと等、小国氏は終始守護側に敵対する動きが顕著であったことを、児童とのやりとりのなかで確認していった。

(3) さらに「伊弥彦神条式写」(弥彦村・高橋家文書)から、次の部分を抜き出し、掲示して児童とともに考えた。

【史料2】

い や ひ こ し ん じ ょ う し き ょう づ し
伊弥彦神条式写

じ ょ う ぶ ん り ょ う
「蒲原郡内の湊からの上分料は、昔から今にいたるまで、とどこおることなく徴収しています。また神にささげる魚をとる船からも、弥彦神社の使いの者が税金をとることは、昔からのしきりです」

この史料における「蒲原郡内の湊」とは、海岸部の港津のみを指すのではなく、河川流域の「津」をも含み込むものとして理解すべきであること、また上分料とは、津料＝通行税ととらえるべきものであり、弥彦神社はこのような経済的権益をもつ存在であったこと等の説明を加えた。

そのうえで、おそらく弥彦神社の神官を兼ねる小国氏等西蒲原の武士たちは、河港がある吉田保や米宇津の支配に関わっていたであろうことを指摘した。

推測を含むものではあるが、以上のような諸事実を踏まえ、再び、守護上杉房方が吉田保と米宇津をなぜ京都の等持院に寄進したのかを問題として提起したのである。

複数の事実認識を踏まえて関係認識を展開し、歴史像をつくりあげていく作業は、児童にとっては困難作業であったが、守護側と弥彦神社に結集する西蒲原の武士団の対立関係が、守護による吉田保・米宇津の寄進をもたらした、守護は室町幕府將軍家の権威を背景に、この地域の武士たちの統制を試みたのではないかとすることを理解させたかったのである。

(4) 越後守護上杉氏がこの地域の支配を本格的に

進めるのは、15 世紀後半の上杉房定段階に到り、それまで在京を原則とした守護が、越後に腰を据えて国内統治に向かったこと、その際、守護上杉房定が早期に行った施策が弥彦神社への参拝であったことは、この地域が守護の越後国支配に重要な位置を占めていたのではないかとすることを、「年表」を用いて説明した。

(5) 最後に年月日が欠損する文書ではあるが「越後蒲原郡川中島所領注文」(米沢市立図書館所蔵)を、**写真 14・15**として OHP で児童に示した。これは、16 世紀初頭に展開した越後守護上杉氏と守護代長尾氏との争い(=永正の乱)の事後措置として、おおよそ中ノ口川と西川との間を示すと考えられる「川中島」の所領が、勝利した守護代側から味方の軍勢に与えられたものであること、守護方として没収された所領の中に「吉田 10 人衆」の所領があったこと、「吉田 10 人衆」とは、河川流域の都市的な場に成長を遂げた商人的武士たちではなかったということを指摘し、この地域に成長した武士の性格を説明して授業を終えた。

以下の**3**は、この三時間の授業を行うにあたって作成した指導計画案である。また**4**として、児童に配布した【小国氏および吉田町域関係略年表】を、さらに末尾に**写真1～16**を掲載するが、授業で児童に配布した地図・写真類などで掲載を省略したものもある。

3. 指導計画案(全3時間)

1次 【中世の吉田町周辺】

現在の景観から出発し、地名・考古遺物および江戸時代前期の越後国絵図などを使って、吉田町周辺の中世における歴史の舞台(自然景観)を考える。

【本時の展開】

過程	学 習 活 動	教師の働きかけ	評価・留意事項
導入 5分	吉田小学校周辺の西川と吉田町について	吉田小学校付近を流れる西川の写真を提示⇒①弥彦山と西川、②西川交通の河港の風景	写真1・2(OHP)
展開 35分	<p>・現在の西川が、とくに大河津分水の開削以後、人工的に統御された川になっていることを確認する。</p> <p>大河津のように、吉田町域にある「津」のつく地名の確認</p> <p>粟生津と米納津</p> <p>正保国絵図から吉田、米納津、粟生津、大河津の位置を確認</p> <p>大川津が東川と西川の分流点にあること、また東川(現信濃川)と西川の川幅は同じであること、ともに信濃川と書かれていることを確認する</p> <p>粟生津が西川と島崎川との合流点に所在すること 米納津も西川分流(大通川)のそばにあること</p>	<p>・大河津分水から信濃川と合流するまでの西川の写真を提示</p> <p>以前、西川には蒸気船が走っていたことは知っていますか。 西川が、現在の姿になったのはいつからか</p> <p>大河津分水は、「大河津」にできた分水⇒分水町の由来</p> <p>吉田にも「津」のつく地名があるね⇒粟生津と米納津</p> <p>津のつく地名は、どういうところにあったのだろうか。</p> <p>正保国絵図から、吉田と米納津・粟生津・大河津の位置を調べさせる。</p> <p>大川津はどこにありますか⇒西川と東川に分流する地点</p> <p>西川と東川(ともに信濃川) 48間×1.8m=86.4m 中ノ口川 64間×1.8m=115.2m</p> <p>粟生津はどういうところにありますか。</p> <p>「津」というのは、河川交通の重要なところに所在したことを予想させる</p>	<p>現在の西川の様子を写真3～6(OHP)で提示</p> <p>写真7・8</p> <p>1922年大河津分水通水</p> <p>正保国絵図を配布する。</p>

	<p>吉田保・米納津(米宇津)の初見史料を確認する</p> <p>米納津の埋蔵銭から、この地域に富裕者がいたことを確認する</p> <p>中世における西川のもつ意味を理解する</p>	<p>ところで、吉田も米納津も随分古くから史料に見えるんだよ</p> <p>吉田保・米納津(米宇津)の初見史料(読み下し文)を提示(12c.までさかのぼる)</p> <p>米納津出土の埋蔵銭を提示</p> <p>「津」とは河川交通の重要な所にあり、そこには「マチ」が出来ていたことを予想させる</p> <p>「吉田保」も西川流域にあり、江戸時代には河港として繁栄したんだよ。</p> <p>吉田市街地をはじめとする西蒲原の集落は自然堤防上(西川およびその分流の旧河道)に存在することを説明</p>	<p>【史料1】を掲示</p> <p>写真9(OHP)</p> <p>空中写真10・11(OHP)</p> <p>信濃川旧河道トレース図(資料配付)、</p>
<p>まとめ 5分</p>	<p>・ノートに分かったことや考えたことを書く。</p>		<p>《評価》 地図(正保国絵図)から、中世における西川および分流のもつ意味を考えることができるか。</p>

2次 【吉田町周辺の武士たち】

中央の政治史の流れと小国氏の動向を追い、南北朝動乱期における西蒲原地域の武士団の性格を理解する。

【本時の展開】

過程	学 習 活 動	教師の働きかけ	評価・留意事項
<p>導入 5分</p>	<p>正保国絵図から 大川津⇒西川⇒信濃川⇒蒲原津 までを確認 ◎「蒲原津」の位置確認</p>	<p>西川の流れをもう一度確認しましょう。</p> <p>蒲原津：古代以来の港津。海上交通と内水面の交通の結節点であることを説明</p>	
<p>展開 35分</p>	<p>西蒲原の菖蒲(あやめ)塚伝説と小国氏との関係確認</p>	<p>燕市小中川の菖蒲塚伝説の紹介(巻町の菖蒲塚古墳・岩室村の菖蒲塚伝説) 菖蒲塚伝説は小国氏の所領に残る伝</p>	<p>資料と地図を配布 写真12・13(OHP)</p>

	<p>小国氏の足跡について簡単に理解する。</p> <p>年表を見ながら、小国氏の動きを地図上でたどる。</p> <p>越後における南北朝の動乱について、年表と地図で確認する。</p> <p>小国氏らが箱根竹の下から蒲原津まで、短期間のうちに帰ってくることを可能にした理由を考え(ノートに書く)、発表する。</p> <p>まとめ 5分</p> <p>ノートに分かったことや考えたことを書く。</p>	<p>説</p> <p>年表をもとに、小国氏の動きを追って見ましょう。</p> <p>◎ 平氏打倒のため挙兵した源三位頼政の弟・頼行の流れ ◎ 鎌倉初期に小国保(現 荊羽郡小国町)に入部。 ◎ 鎌倉中期には岩室村石瀬に拠点を移す。 南北朝期は岩室村天神山城を拠点とするといわれてきた。 ◎ 鎌倉後期以来、小国氏は弥彦神社の神官でもある。</p> <p>児童とともに、南北朝動乱期における小国氏の動向を確認していく。</p> <p>鎌倉幕府の滅亡⇒建武新政府内部における後醍醐・新田義貞側と足利尊氏の対立</p> <p>箱根・竹の下の戦い(12月11日)と蒲原津での蜂起(12月18日)</p> <p>なぜ、小国氏らは、箱根竹の下から蒲原津まで、真冬に一週間足らずで帰ってくる事ができたのでしょうか。</p> <p>・箱根竹の下から蒲原津までの移動距離や所要時間(現在の所要時間、当時の陸路での所要日数)を提示する。</p> <p>箱根竹の下ー蒲原津間の地図を使い、小国氏らが「川」を移動経路として帰ってきたことを示す。</p> <p>小国氏が河川に生きる人びとも支配下に置いていたことに留意させる。</p>	<p>小国氏の系図、及び年表・地図を配布。</p> <p>前掲、小国氏関係年表と南北朝動乱期の「蒲原地域の情勢図」プリントとOHP</p> <p>箱根竹の下ー蒲原津間の地図を配布。</p> <p>《評価》 小国氏の年表を追いながら、南北朝動乱期におけ</p>
--	---	---	---

		る越後国の武士団の動向を理解することができるか。
--	--	--------------------------

3次・【吉田保と米宇津】

吉田町域に展開した中世の歴史の特徴を、とくに越後守護上杉氏が吉田保・米宇津を室町將軍家の菩提所である等持院に寄進した意味から考える。

【本時の展開】

過程	学 習 活 動	教師の働きかけ	評価・留意事項
導入 5分	前時を振り返る。	数人の児童を指名し、前時までに学んだことを児童の言葉で説明させる。	
展開 35分	吉田保及び米宇津の寄進に関する史料を読む。 児童の予想 南北朝後期～室町期の小国氏の動向を年表で確認する 弥彦神社と蒲原郡内の港津との関係を理解する 再び吉田保及び米宇津の寄進の意味を考え、発表する。 守護上杉房定の弥彦神社参拝を年表で確認させる	吉田保及び米宇津の寄進に関する史料を児童とともに説明・補足しつつ読んでいく。 なぜ、吉田保と米宇津は、等持院(室町幕府將軍家足利氏の菩提所)に寄進されたのでしょうか。 ・蒲原郡代長尾氏の夜討ち ・蒲原津に押し入る ・黒滝と京都で謀叛 史料提示 机間支援を行い、随時助言する。 守護が、弥彦神社に結集勢力する西蒲原地域の武士団を本格的に掌握する動きが出てきたことを説明 年表から守護側が米宇津の年貢を將軍家(等持院)に払わなくなっていること。 ⇒守護大名の幕府からの自立 ⇒戦国動乱へ 「吉田 10 人衆」について	吉田保及び米納津の寄進に関する史料1を掲示 寄進の内容を確実におさえさせる。 前掲、小国氏関係年表を利用 【史料2】読み下し文を掲示 この地域の武士たちにとって、守護の寄進はどのような意味があったのか。 前掲年表 前掲年表 写真 14・15 《評価》 中世越後国における吉田町域のもつ意味(吉田
まとめ 5分	ノートに分かったことや考えたことを書く。		

		保及び米宇津の寄進の意味)を考えることができるか。
--	--	---------------------------

4.小国氏および吉田町城関係略年表

1180年4月	源頼政、後白河院の子・以仁王とともに、平家を討つため兵をあげるが、敗死。
1180年8月	源頼朝、伊豆(静岡県)で平家を討つため兵をあげる。
1185年3月	平氏、壇の浦(山口県)で滅亡。
1192年7月	頼朝、征夷大將軍になる。
1212年1月	三代將軍源実朝、弓 始の式における小国源兵三郎頼繼の弓の芸をほめる。 ※頼繼は源頼政の弟・源頼行の孫。宗頼の子(小国氏系図を参照)。 ※小国という姓は、越後国小国保(刈羽郡小国町付近)に居住し、その地名を名字としたもの。
1221年5月	承久の乱がおきる。日本海側から京都に攻める幕府軍に、越後国の小国頼繼らが従う。
1333年5月	北条高時が自殺し、鎌倉幕府滅亡。 この日、新田義貞にしたがった討幕軍のなかに、越後国の池七郎がいたことがわかる。 池氏は御家人であり、また弥彦神社の神官。 ※小国氏は、このころまでには岩室村石瀬に拠点を移し、弥彦神社の神官にもなっていたようであり、池氏らとともに、討幕軍に参加していた可能性がある。
1333年6月	後醍醐天皇、建武の新政を開始。
1333年8月	新田義貞、越後守となる。
1335年7月	北条高時の遺児・時行(ときゆき)、鎌倉を攻める(中先代の乱)。
8月	足利尊氏、京都から兵を率いて鎌倉に向かう。
11月19日	後醍醐天皇、足利尊氏を討つため、京都から新田義貞を出陣させる。 この時、新田義貞の軍勢の中に、越後勢として、小国・河内・池・風間氏らがいた。
12月11日	新田義貞、足利尊氏と箱根・竹の下で戦い敗れ、京都に逃げる。そのあとを、尊氏軍が追走。 ※この時、小国・河内・池・風間氏らは越後に戻り、12月18日までには蒲原津を占領する。
12.19	蒲原津を占領した小国氏ら、新田方の軍勢を討つため、佐々木加地景綱を大将とする越後の足利方の軍勢が蒲原津に向かう。 ※これ以来、越後国において足利方と新田方との抗争が本格化。 ※小国政光は、岩室村石瀬を本拠とし、天神山城による。蒲原郡の新田方の大將的存在。
1336年6月	足利尊氏、京都に入る。武家政治を再開。後醍醐天皇は、新田義貞らをしたがえ、比叡山にこもる。 ※このころ越後では、小国政光ら、新田方が優勢。
10月	後醍醐、尊氏の和平工作により京都に戻る。新田義貞は、越前国(福井県)に向かう。
12月	後醍醐、吉野に向かう。南北朝に分裂。
1338年壬7月	新田義貞、越前国で敗死。
1341年6月	小国一族ら、蒲原津に城郭をかまえ、たてこもる。 この月、上杉憲頭、越後・南朝勢の城をことごとく打ち落としたりと鎌倉に報告する。

※上杉憲顕は、このころ、越後国守護に任命されたと考えられる。

- 9月 小国政光ら、重ねて兵をあげる。
- 1350年10月 室町幕府内で足利尊氏と直義兄弟の対立が強まる。このころから全国的に南朝勢の動きが再び活発になる。
- 1352年8月 反幕府方として、小国氏らの動きが再び活発になる。
- 1362～67年ころ** 小国氏、蒲原郡代長尾新左衛門尉(三条に居住か)を夜討ちし、殺害する。
- 1392年壬10月 南朝の後亀山天皇、京都に戻る。天皇家に伝来する神器を北朝の後小松天皇にさずける(南北朝時代が終わる)。
- 1393年7月** 小国氏、関東管領上杉氏が領有する蒲原津に押し入る。
- 1380～1412年の間のこと。**
- 小国氏と黒滝氏(のちの山岸氏か)が京都で越後守護上杉房方に対して謀叛をたくらむが、発覚して京都から逃げる。この時、小国らは、越後の武士たちにも同意することを働きかける。
- ※黒滝城を居城とする山岸氏は弥彦神社の神官。
- 1406年11月** 越後守護・上杉房方、蒲原郡内吉田保・米宇津を等持院(京都)に寄進する。
- ※等持院は足利尊氏がつくらせた寺で、尊氏はこの寺に埋葬された。それ以降、代々の室町幕府将軍の葬式はこの寺で営まれ、歴代の将軍の位牌や像がまつられている。
- ↓
- 足利義満、蒲原郡内吉田保・米宇津に対する上杉房方の寄進により、等持院の所領となることを認める(義満は、1394年、将軍の地位を去り、太政大臣となる)。
- ↓
- 室町幕府将軍足利義持、吉田保・米宇津を等持院雑掌の支配下に置くことを命じる。
- 12月** 守護上杉房方、「吉田」を等持院側に渡すよう、原孫四郎に命じる。
- 12月** 守護上杉房方、「米宇津」を等持院側に渡すよう、長尾彌五郎に命じる。
- 1408年5月 足利義満死去。
- 1449年2月 上杉房定が越後守護となる。
- 1450年12月 上杉房定、守護代長尾邦景を切腹させる。
- 1451年3月 守護上杉房定、弥彦神社に参拝する。
- 1459年8月 等持院領「吉田・米宇津」は、足利義教の追善料所となる。
- ※足利義教は第6代室町幕府将軍。1441年に赤松満祐に殺された(嘉吉の乱)。
- 1490年壬8月 このころ、吉田・米宇津は、等持院の支配から離れ、おそらく守護側の人物を代官とする支配が行われていた。



写真1:「学び橋」から見た西川と弥彦山



写真2:「中央橋」から見た西川



写真3:大河津分水
(週刊朝日百科『世界の地理』43「新潟・富山」より)



写真4:大河津付近で分流する西川



写真5:新川の上を流れる西川
(新潟市榎尾付近)



写真6:信濃川に合流する西川(左下)
(新潟日報事業社『空からの新潟市』より)

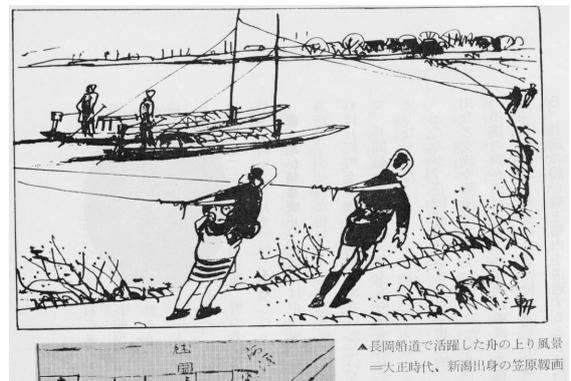


写真7:大正期西川の風景
(郷土出版社『新潟・西蒲原の百年』より)



写真8:明治末期の長岡船道
(郷土出版社『新潟・西蒲原の100年』より)



写真9:米納津出土の珠洲焼甕と埋蔵銭
(『吉田町史』資料編Iより)



写真 10 : 吉田付近空中写真
(国土地理院刊)



写真 11 : 燕市小中川付近の自然堤防
(国土地理院刊)

菖蒲塚伝説と小国氏

① 3 小中川地区

菖蒲塚の伝説

源三位頼政の妾・菖蒲は乱を越後に避けて二階堂の地へたどり着きました。そして、八幡神社境内の木の下に仮り住まいしていましたが、ここで夫・頼政の死を聞き、悲嘆やる方なく竹野町（巻町）の某寺へ移り住んで、頼政の冥福を祈りつつその生涯を閉じました。

二階堂の住民はその死を聞くと、遺物を埋め碑を建てて菖蒲の菩提を弔ったのでした。

（注、二階堂には頼政と菖蒲について、別に次のような話が伝わっています。）

朝宮殿の屋根に出没するヌニ（鳥）を射落とした頼政が、宮女・菖蒲の前を下げ渡され、越路をたどって二階堂に至ったときのことでした。里人に乞われて、頼政は鎮守社の森のカラスを射落としたのですが、それ以来、カラスは再び来ることがなく、後世俗謡に「小吉・小中川・二階堂の森はカラス泊まらぬ不思議の森」と唄われるようになったということです。

写真 12 : 菖蒲塚伝説と小国氏 (『燕市史』民俗・社会・文化財編より)

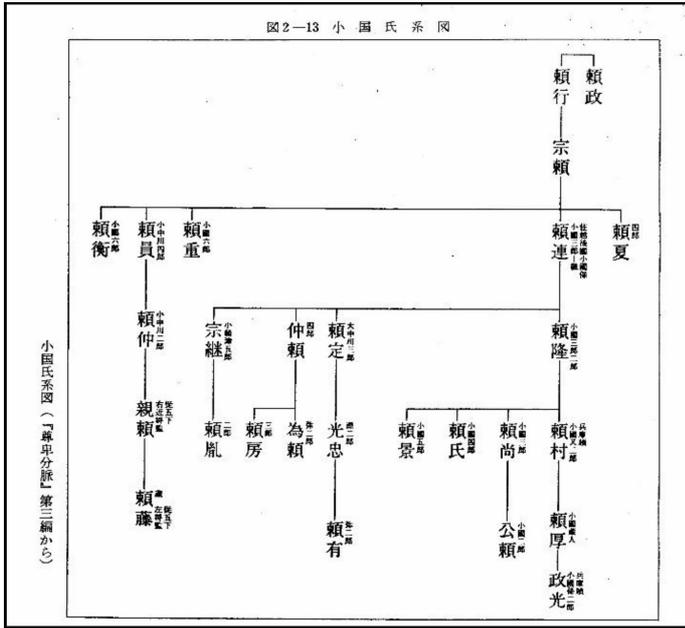


写真 13 : 小国氏系図(『燕市史』通史編より)

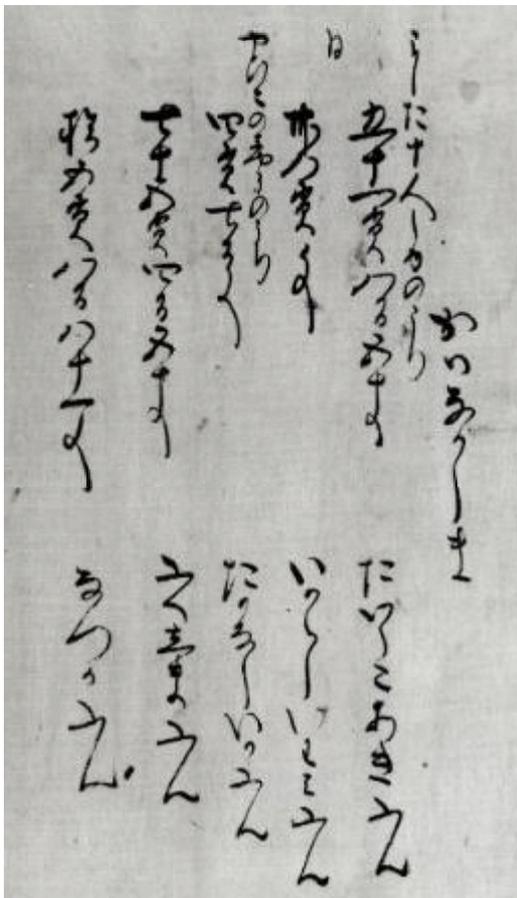


写真 14 : 蒲原郡川中島所領注文
(米沢市立図書館所蔵)

三〇 年代不詳 蒲原郡川中島所領注文

かへなかしま
よした十人しゆのうち
五十一貫八百五十文
同 卅八貫文
やひこのしやうのうち
四貫七百分文

(平) 子安芸分
たいらごあきふん
(五十嵐石見分)
いからしいわみふん
(高) 梨伊賀分
たかなしいかふん

(福) 島分
ふくしまふん
なつかふん

七十五貫四百五十文
拾五貫八百八十一文

(新潟県史 資料編 4 一九九九号 米沢市立図書館所蔵 古文書集 所収文書)

写真 15 : 蒲原郡川中島所領注文
(『燕市史』資料編 I より)



写真 16 正保二年越後国絵図模写図(新潟大学教育人間科学部日本史研究室架蔵)

(2005年2月28日受理)